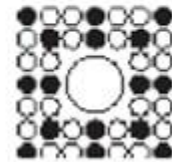


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter



No.27

July 5, 2011

会長退任のあいさつ:BCJA の若返り



BCJA 前会長 横川信治

齊藤友博前会長の後を受けて、2010年の3月から会長に就任しました。2010年度はBCJA奨学金が開始されてちょうど10年に当たり、BCJAとしては記念すべき年でした。この1年間の活動はBCJA奨学金の維持と拡大を

中心に行われました。英国大使 David Warren 氏には、BCJA 奨学金制度による英国での日本人奨学生支援を高く評価していただき、感謝状をいただきました(別項参照)。また AGM を BCJA 奨学金 10 周年記念集会として多くの会員の皆様と BCJA スカラーのみなさんに参加していただくことができました(別項参照)。

この1年を振り返って、BCJA の課題を2つあげることができます。第1は、減少傾向にあった会員数を増大させ、若返りをはかることです。BCJA の会員は 1952 年から 2000 年にかけての BC スカラーが中心で、2000 年には 900 名を超える会員数を誇り、活発な活動がされていました。2000 年を最後に BC スカラシップが廃止されると新会員はほとんど増えず、自然減少のために昨年には約 600 名程度まで減りました。新会員を増やさないことには行き詰ることは目に見えています。幸い、2001 年からの BCJA スカラシップによって、BCJA スカラーだけでも候補者は 90 名にのぼり、毎年 10 名ずつ増えて行くことになります。2010 年度は AGM の成功によって新たな会員を 17 名増やすことができました。若返りのためには、BCJA スカラーにとって魅力ある BCJA を作る必要があります。

第2は、経済基盤を安定化させることです。BCJA の活動には、郵便代金などの事務費用およびホームページの費用などで年間 20 万円程度が必要です。現在までこの費用は、主に一人当たり 1 万円の生涯会費によって賄ってきましたが、この 10 年間会員数がほとんど増えていないということは、会費収入が全くなくなり経済的に危機に陥るということです。他方では、1 万円の会費が若い会員の入会の障害となっていたことも考えられます。そこで、新入会員を増大できるように会費制度を整備し、経済基盤の安定化を図ることにしました

(別項参照)。

この1年間は、Warren 大使、James BC 代表(及び担当の佐久間様)、BCJA 役員、BCJA 事務局の皆様の協力を得て、大変楽しく活動させていただきました。厚く御礼申し上げます。この調子で BCJA の若返りと活発化が軌道に乗り出すのではないかと期待しています。

(Nobuharu Yokokawa, 武蔵大学経済学部教授、Queens' College, University of Cambridge, 1977-81)

新会長就任のご連絡

2011年3月より、BCJA 会長に、青柳昌宏氏(独立行政法人 産業技術総合研究所、National Physical Laboratory 1994-95)が就任されました。新会長の挨拶は次号にて掲載いたします。

2010 年度英国留学奨学金審査委員会ご報告

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2001 年から始まりました BCJA 英国留学奨学金は、今年で丁度 10 年目を迎えます。本年度も、昨年に引き続き 8 名の方々に奨学金を差し上げることが出来ました。奨学金のためにご寄付いただきました BCJA 会員の皆様方、審査を担当されました委員の先生方に、心からお礼を申し上げます。

本年度の応募者は総数 54 名で、昨年の応募者 43 名より 11 名増加しました。本年度は、日本全国の大学で英国の大学との学部学生の交換留学制度が整備されてきた状況を反映してか、学部レベルの若い諸君からの応募が増えたのが、ひとつの特色でした。

本奨学金の応募者は非常に質が高い点が評判となっていますが、この傾向は、学部レベルでの応募者も含めて、今年度もこれまで通り維持されました。応募者の 分野は、英

文学、医学、歴史学から、政治学、経済学、法学、国際関係、デザイン、建築学、ナノサイエンス、作曲学と広範囲に及んでおり、研究目的や大学院レベルでの英国留学で、動機や計画が明確な方々を選考するようにつとめました。

今後も、BCJA 奨学金は、BCJA 会員の善意の寄付により運営を続けることになって居りますので、ご支援の程よろしくお願ひ申し上げます。

2010 年度奨学金授与者リスト

姓	名	留学先研究機関	研究分野	所属/出身校
武田	裕子	London School of Hygiene and Tropical Medicine	公衆衛生学	三重大学
赤羽	桂子	Institute of Child Health, University College London	医学(小児科)	富山医科薬科大学
森本	洋太	University of Birmingham	作曲(コンピュータ音楽)	くらしき作陽大学
鈴木	悠	University of Essex	国際人権法	東北大学
谷口	翔平	King's College London	ナノサイエンス(無機化学・生化学)	大阪大学
菅原	健志	University of East Anglia	イギリス外交史	京都大学
吉見	蘭	SOAS, University of London	開発援助論	大阪外国語大学
庄子	ひとみ	King's College London	英文学	日本女子大学

2010 年度 BCJA 年次総会について

今年度の AGM は、BCJA 奨学金 10 周年記念として、多くの会員と 7 人の BCJA スカラーを迎え英国大使館で行われました。英国大使 David Warren 氏には、BCJA 奨学金制度を高く評価していただき、BCJA の秋の総会を英国大使館にて開催するようお誘いを受けましただけでなく、"Relations between the United Kingdom and Japan : Commonalities and Differences"と題して総会での講演もお引き受けいただきました(別項参照)。

(1) 会長報告と審議

会費:郵便代金などの事務費用およびホームページの費用など実費(年 20 万円程度)を会員で負担するために、年 2000 円の会費を徴収する。3 年以上会費支払いがない場合には、生涯会費 1 万円をすでにいただいた方については、4 年目からは郵便によるお知らせを廃止するが、会員としての籍は残す。新たに会員になら

れる方は年会費制なので、4 年目からは除籍する。以上が認められました。なお、留学中の BCJA スカラーの方については、「在外会員」として会費は無料とすること、帰国後は正会員として会費を払うことが、2011 年 2 月 23 日の委員会で決められました。「在外会員」はメールで Newsletter や AGM の案内等を受け取れます。BCJA スカラーを積極的に会員に勧誘することが決定され、その後 10 名の BCJA スカラーから入会申し込みがあり、4 名の BCJA スカラーから在外会員の申し込みがありました。またその他に 3 名の方から入会申し込みがありました。別項参照。

- (2) BCJA 奨学金報告:別項参照
- (3) 会計報告と承認:別項参照
- (4) Newsletter・ホームページ報告:別項参照
- (5) 新役員および新執行部選出。会長 青柳昌宏、会計 島津幸男、講演会および AGM 担当 西田宏子、Newsletter 担当 石井加代子(2011 年 2 月 23 日の BCJA 委員会において補充)、BCJA スカラー担当委員 斉木臣二、役員 白鳥令、池島大策、平孝臣、山口晶子、事務局 川崎由紀(敬称略)が承認されました。

なお、総会についてご質問ご意見がございましたら、yhytst2005@yahoo.co.jp までお寄せください。



参加者による記念撮影

駐日英国大使 David Warren 氏による講演内容

Digest of speech on 18 November 2010

"Relations between the United Kingdom and Japan:
Commonalities and Differences"

The Ambassador spoke about the breadth of bilateral relations between the United Kingdom and Japan. He said that he was privileged to be Ambassador in a country with which the United Kingdom had a strong and virtually problem free relationship. Trade and investment links remained very close, with over 1200 Japanese companies investing in the United Kingdom, employing over 100,000 people, and many British

companies exporting successfully to Japan, although the level of foreign direct investment in Japan was much lower than that in the UK. The City of London was also a very important financial centre for Japanese companies. The Embassy were busy promoting closer partnerships in other fields as well, particularly those of science and innovation, the broad range of cultural contacts promoted by the British Council, and increasingly close links in the field of education, with universities entering long-term partnership arrangements between the UK and Japan.

The Ambassador also explained a little of the work of the Embassy in promoting the relationship between the British and Japanese Governments. This covered the major areas of foreign policy, on most of which Britain and Japan thought along very similar lines, for example the importance of Iran complying with its nuclear obligations, the need for continued democratisation in Burma and the situation on the Korean peninsula. He also discussed the Embassy's work with the Japanese authorities in the context of the management of the international economy through the G20 and the work in the United Nations to combat climate change in the run-up to the next conference in Mexico later this year. Closer defence links were also increasingly important. The Ambassador talked a little about the areas of disagreement with Japan, many of which were well reported in the press: the concern in the UK about continued Japanese whaling practices, the desire of the EU for a discussion with Japan that might lead to the abolition of the death penalty, and the continuing hope of the UK, US and many other countries that Japan would ratify the Hague Convention on Child Abduction.

The Ambassador spoke about the importance of deregulation in the context of Japanese economic development. We strongly supported the Government's desire to participate in free trade arrangements, and hoped that the Government would address the outstanding problems of non-tariff barriers and further deregulation, in order to provide the best environment for possible negotiations on an Economic Integration Agreement with the EU.

The Ambassador said that he attached enormous importance to encouraging the widest possible exchange of ideas with our friends and colleagues in Japan about the way Government worked, the way we might learn from each other's countries, and said that he hoped that as we did so, there would be a real sense in Japan of how the United Kingdom had changed in recent years: sometimes he feared that the impression of the UK in Japan was a little old-fashioned and traditional, whereas Britain had in recent decades become a much more diverse, innovative and vibrant country. He thanked the British Council Japan Association for their important work in encouraging closer understanding between Britain and Japan.

2006 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

Warwick での研究生生活

小野寺 麻希子

私は、イギリスの Warwick 大学の博士課程で国際関係論を勉強しました。私は仕事をしていたので、イギリスに住むことはできず、1年に3回ほど Warwick に行き、指導教授と会って、事前に提出した論文についてコメントをもらい指導を受けました。このようなやり方は、私が博士課程に出願するときに、「仕事があり、イギリスには住むことはできないけれども、イギリスに指導教授を年に数回訪問する他、メール等で必要な課題等を提出して行きたい」旨希望をはっきりと伝えたところ、承諾をいただいたものです。おかげで、イギリスに通う形で博士を取ることができました。

Warwick 大学は、イギリスの中央部にあり、バーミンガム空港より車で 30 分ほど、また、ロンドンより電車とバスで 2 時間ほどかかります。周囲は、19 世紀に温泉が出て保養地であった Lamington Spa やシェークスピアで有名な Stradford-Upon-Avon 等の素敵な街があります。Lamington Spa は、今でもヴィクトリア朝時代の建物が残り、湖に白鳥がいる公園等があつてとても素敵なおところだったので、Warwick 大学に行く際には、Lamington Spa の B&B によく宿泊していました。

今年 8 月に博士を取得しましたが、私の博士課程での研究は、ほとんどは指導教授とのマンツーマンでのやり取りでした。指導教授とのやり取りを通じて、驚いたのが、指導教授とはファーストネームで呼び合うことです。指導教授は、私のことを一人の研究者として対等に扱ってくれ、おかげで自分の意見を自由に言い、ディスカッションすることができました。ただ、私が英語を流暢にしゃべれないせいもあり、意見を控えめに言っていたところ、もっと積極的に自分の意見を言うようにとよく言われました。イギリスでは、一人の研究者として独立して計画を立て、論文を完成させることが求められるので、締め切りを決めるのも自分で、せきたてられることはありませんでした。仕事をしながら博士論文を書いていたので、このようなやり方は、非常に自分に合っていたと思います。

博士論文は、日本の東南アジア外交の政策決定について「パターン化された多元主義」と国際交渉と国内政治の相互作用を分析するのに有用な「2 レベルゲーム」理論を用いて、統合モデルを作り分析をしました。博士論文では、オリジナリティが強く求められるので大変苦勞しましたが、指導教授がインスピレーションやヒントをくれて、常に ambitious であるようにと励ましてくれたので、いろいろな政策決定モデルを見て挑戦をして、やっと自分の分析に当てはまるいいモデルが見つかり、自分なりに論理を展開できました。

最後になりましたが、BCJA の奨学金を頂きまして心より感

謝しております。日本に帰国してから、イギリス大使館で開催された BCJA の総会にも出席させていただき、OB・OG の方にもお目にかかる機会を得て、大変良かったと思っております。
(2006 年度 BCJA 奨学生, University of Warwick, 国際関係論)

2009 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告 留学レポート

杉浦 寛奈

私は、2009 年 9 月から 2010 年 9 月まで London School of Hygiene & Tropical Medicine MSc Public Health (LSHTM MSc PH)にて学びました。

何よりもまず、BCJA の皆様へ奨学金のお礼を申し上げたいと思います。奨学金は、航空券代と引越代に使用し、留学生生活を開始することができました。また、奨学金授与者であることの証明を BCJA の名前で発行頂けたことは、益々厳しくなっておりますイギリス学生ビザ申請の際に大変強い味方でした。そして、大学院修了後もニューズレターや会合などで、団体としてのつながりが継続しそうであり、大変楽しみにしております。

大学院での様子は、私の所属先であります横浜市立大学精神医学教室のホームページにも記載してありますので、ご興味のおありの方はぜひご活用ください。

(http://www-user.yokohama-cu.ac.jp/~psychiat/foreign_report.htm)

考え抜かれた授業、教材、指導法。世界を動かす最前線の講師陣。意識の高い国際色豊かな同級生。著名人を身近に感じられる講演会と同じくらい著名な人々が座る聴衆席。ありとあらゆる側面が世界トップクラスで、大変充実し、多くを学んだ一年でした。特に、地位、国籍、職種などは全く関係無く、お互いを尊重し合える環境であったこと、またそれを保つ意識の高さは、大変心地の良いもので、この姿勢を私も身につけ保ちたいと思います。

学生生活は大変忙しいもので、平日夜や週末も時間を惜しんで勉強いたしました。学校も個人チュータを配備したり、ポッドキャストへ録音したりなど様々な支援をしてくれますし、同級生との励まし合い、意見交換、勉強会も大きな助けとなりました。同級生達は、今後ずっと助け合う国際保健の同志となることと思います。

学業内容は、具体的には、疫学、統計、医療経済、ソーシャルリサーチを基本科目として、更に選択科目で、物質乱用、精神保健、デザインメイキングなどを選びました。エッセイと試験による評価があり、最後は 1 万ワードの論文の提出が課題で私はデータアナリシスを行いました。

卒業進路は様々で、医学部進学、博士課程進学など学

業へ進学する者もいれば、臨床に戻る者、NGO や研究所に勤務の者もいます。私は、教授にご紹介いただき WHO 本部の精神保健部で 3 ヶ月間のインターンを 2010 年 12 月末まで行っています。インターン業務においても、大学院で学んだ事が本当に役に立っていて大変実践的なカリキュラムであったのだと実感しております。また、WHO 内には同窓生が大変多く、とても心強いです。そして、国際保健、開発の分野では英語圏とフランス語圏の勢力は大変強いことも WHO で感じております。特に、発言の質や幅の深いイギリスとアメリカの存在を感じることはたびたびあります。その中でも都市としてロンドンとニューヨークの人的資源、情報資源の集約力は飛び抜けているのではないかと思います。例えば、研究所立地、会議開催地、ファンド立地、交通の便など。そんな点からも LSHTM を卒業したことは、今後の私のキャリアにおいても大変重要な点となるのではないかと思います。

現在インターンとして加わらせて頂いているのは、mhGAP というプロジェクトで、精神保健のトリートメントギャップ(治療を受けるべきで受けられていない人と受けられている人の差)を低資源の中でいかに縮めるかというものです。

(http://www.who.int/mental_health/mhGAP/en/) 精神科医として、公衆衛生専門家として、大変興味のある分野なので、とても充実したインターン生活を過ごしております。また、JPO(http://www.mofa-irc.go.jp/boshu/boshu_aejpo.htm)にも合格いたしましたので、来年度以降 WHO で勤務が可能となるように現在調整中です。

以上のように、BCJA の応援を受け、LSHTM での大学院を修了することができ、更にそれが国際機関勤務へつながり大変嬉しく思っています。今後とも、世界の保健、日本の保健に貢献することができれば本望です。そして、BCJA の活動も応援したいと思っております。今後ともよろしく御願いたします。

(2009 年度 BCJA 奨学生, London School of Hygiene and Tropical Medicine, 精神分析学)

2009 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告 英国留学/アフリカ研究生活

熊丸 耕志

行けばなんとかなる、なんとかする。根拠のない自信から始まった私の英国留学に、奨学金という一つの大きな信頼を与えて下さった BCJA の皆さまに、心よりまず御礼申し上げます。私は英国 Loughborough(ラフバロ)大学大学院の Water, Engineering and Development Centre、通称 WEDC と呼ばれる水と衛生に関する研究機関に Ph.D(博士後期)として所属し、研究活動を行っております。WEDC は開発途上国の上水道、下水道、公衆衛生、ゴミ処理そして環境に特化した研究を行っており、DFID(英国国際開発省)並びに数

多くの国際機関、NGOs との緊密な協力を行い、現場からノウハウを吸収し、実用的な研究を進めている研究機関です。

私の英国での生活は。と本レポートを綴りたいところですが、私の英国留学の大半はアフリカの大地に染まっています。と申しますのは、上記の例外ではなく私の研究対象も開発途上国の給水サービスについてであり、私はザンビアの地方村落給水サービスに関する研究を UNICEF や国際 NGOs と共同で現地ベースにて行っております。

ザンビア共和国はサハラ砂漠以南に位置する内陸国で四方を八カ国に囲まれた緑豊か、人豊かな国であります。同地は他のアフリカ諸国と比較すると雨に恵まれた地域が多くを占めておりますが、飲料水に適した水を日常的に得ることが非常に難しく、水系感染症により5歳児未満を中心に数多くの命が失われている状況です。地方村落給水施設もその9割以上がドナー諸国からの援助に依存しているため、単発的に終始しがちな援助では持続的な安全な給水へのアクセスが課題であることを受けて、現在 UNICEF を中心として従来とは異なった給水プロジェクト(Self Supply)が北部地域、Luapula 州において試されています。従来からのハードウェア給水助成事業とは一線を画し、Self Supply は水サービスをソフトウェア支援のみにより確立させる試みです。私も共同研究者として、同プロジェクトに携わっており、水質を細菌学的観点ならびに公衆衛生の観点からモニタリングし、給水設備の持続性、住民の近接性、受容性などの多角的な観点から総合的に評価することによって、持続的な給水戦略を究明することを目的としております。



研究地、ザンビア kids1



研究地、ザンビア kids2

かに留学にしているのかね、と自問せずにはおられません。が、やはり英国留学の一つの醍醐味は、数多くの開発学や国際関係論といった学問が英国において著名である様に、開発援助に対しての実用的な研究、そしてその分野における実務者、研究者そして外部機関とのネットワークの充実ぶりを肌で感じる事が出来ることにもあります。この特性を活かした研究が行いたい、というのが私の英国留学の目的でありましたので、やはり私は英国に留学しながらも、アフリカを現場ベースで研究、という柔軟性に満ちたこの生活に感謝しております。

わずかながら英国生活に触れさせていただきますと、ラフバロ(Loughborough)という街はロンドンから電車で約 1 時間のレスター州北部に位置しています。上記の WEDC に限らず Sports science も著名であり、2012 年ロンドン五輪に関連して日本選手団、そして本国英国選手団の事前合宿地としても決定しています。この稿は大学の研究棟で執筆しておりますが、窓の外に見える景色は雪景色で、2010 年冬はここ 100 年の英国の記録の中で最も寒い冬を迎えている様であります。アフリカでの研究生活も馴染んだとは言え、やはり英国の母校、街に帰ってくると、同じように地球のどこかから研究を終えて帰ってくる親しい PhD の仲間と共に、熱く語り、時には共に凹み、そして酒を交わすことは心を落ち着かせ、また奮い立たせる上で大切な地となっていることを痛感しています。



英国、研究棟の庭、給水ポンプ色々

私にとっての 2011 年は博士課程 3 年目となり、論文の執筆の傍ら、ザンビアと類似した水プロジェクトを行っているエチオピアにて UNICEF と共同で研究をさせていただく予定です。写真のような尊い笑顔の子供たちの命が失われることのないよう、日本、英国という地から繋がっていく世界への好奇心、常に初心と感謝を忘れず、一日一日を生きる所存であります。今後益々の BCJA に関わる皆さまのご活躍を祈願し、本稿の末尾とさせていただきます。誠にありがとうございました。

(2009 年度 BCJA 奨学生, Loughborough University, 環境水工学)

ここまで書くと、君は英国に留学にしているのかね、アフリ

2009年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

イギリスで途上国の教育を研究する

草薙 佳奈子

2008年からロンドン大学教育研究所に在籍し、インドネシアの教員について研究をしています。英国の物価の高さに加え、留学先以外の国で調査を行うのは大きな負担となりますが、皆様のご支援のお陰で、長期の現地調査を実施することができました。2009年奨学生として支援して下さったBCJAの皆様に深く御礼申し上げます。

ロンドン大学教育研究所(IOE)について

IOEは教員養成を目的として設立された歴史から、世界中から元教員や、教員を目指す学生が集まる大学で、修士課程で約4000名、博士課程では約700名が在籍しています。博士課程では自由な場所(オンラインも含む)やスタイルで研究を進めることができるのが特徴で、主に昼間のクラスはインターナショナル・スチューデントが多く、夜間にはパートタイムで働きながら通うイギリスの生徒が多いという特徴があります。特に社会科学の分野の研究では高い評価を受けていて、生徒の年齢も学部卒の人から退職後に博士に進学した方まで様々で、教授と生徒の垣根が低く自由な雰囲気と自主性を尊重した学風を感じます。IOEでは英語教育やイギリスの教育について学ぶ人がいる他、元植民地だったアフリカ、パキスタンなどをはじめ多くの国から留学生を受け入れており、途上国の教育について研究している人も多数います。

留学までの経緯

留学する以前は、NGOや国際協力機構(JICA)の仕事でインドネシアの開発援助事業に携わっていました。私がインドネシアに到着した1ヶ月後の2004年12月26日にスマトラ島沖地震が発生し、被災地アチェから離れたジャカルタで被災地の様子が映し出されるテレビをローカルスタッフと涙を溜めて見守ったことを今も覚えています。2005年にアチェの復興支援、2006年に東チモール難民の支援にNGOの業務で携わりました。2006年にはJICAの中部ジャワ地震の復興支援事業で中学校を回り、一日も早く普通の学校に戻したいという政府関係者、学校関係者の強い思いに感銘を受けました。これがご縁でジョグジャカルタ近郊にある中学校の教員について研究をするようになりました。

研究について

前述の通り、インドネシアで働いたことがきっかけとなり、インドネシアの教員研修について研究をしています。インドネシアでは1994年に9年間の義務教育が義務付けられ、就学率は順調に向上している一方(中学校では75%以上)、教育の質を向上させるため教員養成が大きな課題となっています。また受験戦争が激しくなる一方で、学校間、生徒の学力の格差はますます広がっています。私の研究は、インドネシアの中学校で日本の授業研究(教師が授業を公開し、それ

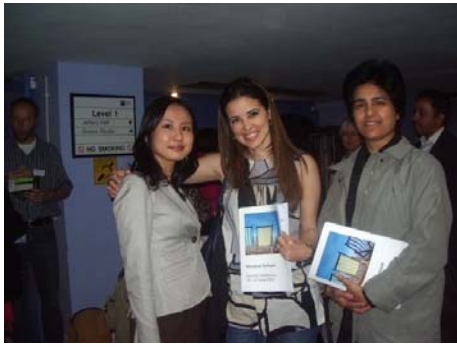
に参加した他の教師とともにその内容について話し合い学びあう)の実践について、エスノグラフィー調査を行うものです。エスノグラフィーとは、現地に滞在して文化を学ぶことで、現地の人の視点で何が起きているのかを見ていく手法です。インドネシアでは講義形式の授業スタイルが主流を占めており、また教師が生徒の名前を覚えていないことも多く、教師と生徒の関係も日本と比較すると希薄です。日本のように公開授業や授業参観もなく、授業を公開することにも抵抗があります。そんな状況下で教師が授業についてどのような話し合いをするのか、また日常の授業に授業研究で話し合われた内容がどのように反映されるのか、教師や生徒の日常とどのように関係しているのか、について研究しています。校長先生をはじめ先生方には家族の様に接していただき、8ヶ月間のあいだに、たくさんの授業や学校イベントに参加し、日常のおしゃべりから教師がどのように暮らし考えているのか多くのことを学ばせてもらいました。

日常生活

私の住んでいたカンブンと呼ばれる下町は、ジョグジャカルタ市の中心地から裏道を一本入った、小さな道の入り組んだ場所にあり、低所得層の大家族が小さな家に肩を寄せ合って暮らしています。家が小さなことも影響してか、細い路地はいつも人で賑わっていました。ここで現地の大学院の学生であるインドネシア人の友人と、近所の小学生向けに無料の英語クラスを開催していました。場所は知り合いだった町内会長さんをお願いして町内会の事務所をお借りしました。インドネシアでは小学1年生から英語が教えられています。教師が十分な訓練を受けていないこともあり、教えられるのは文法と練習問題がほとんどです。楽しく英語を学んでほしいという思いから、身近な家族や食べ物、ゲームや歌などを取り入れながら英語を学びました。当初は私が帰国するタイミングで英語クラスを終える予定だったのですが、嬉しいことに子供たちから続けて欲しいと頼まれて、現在もインドネシア人の友人がクラスを続けています。



下町英語クラスの生徒と



IOEのサマーカンファレンスにて

現在の活動

現在はフィールドワークから帰国し、日本でデータの分析を続けています。ときどきは日本の小中学校にもお邪魔して、日本の授業も見学させてもらったり、日本の研究者の方と意見交換を行い研究のヒントをいただいています。将来また途上国の現場で先生方と仕事をできる日を夢見て、博士論文の完成を目指したいと思います。

(2009年度 BCJA 奨学生, Institute of Education, University of London, 教育学)

2009年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ランカスターより

井上 千尋

1. 研究について

英語と国際関係を勉強したいと思い入学した東京外国語大学で、講義を受けるうちに言語テスト論、第二言語習得、英語教育の分野に興味を持ち、今に至ります。ランカスターの博士論文では「英語のスピーキングテストにおける narrative tasks の同等性」を調べました。Narrative task の例としては、英検準1級の二次試験で課されるタスク(4コマのイラストを元にストーリーを英語で話すというもの)が該当します。Narrative task では通常、受験者が英語の基本的な文構造を使えるか、時制や代名詞、つなぎ語などをきちんとコントロールできるか、一貫性のあるストーリーを話せるか、といったことに焦点が当てられます。これは日本国内のみならず、海外の英語テストでもよく使われるタスクですが、現行のテストにとって、例えば「2009年5月の受験者に課されたタスクが2010年12月に課されたものと同じ難易度であるかどうか」ということは非常に重要です。もし異なっていれば、受験者にとって公平な結果が出ないばかりか、そのテストの信頼性を大きく損なうことになるからです。

しかし、英語テストを実施している機関の多くは、「タスクの難易度の同等性」という情報をまったく開示していないか、していても点数や合否に基づく統計的な情報のみにとどめています。点数の同等性は、タスクの同等性を判断する1つの側面にしか過ぎないため、タスクの特性や受験者が実際に話

した英語を分析してみたら実はタスク間でかなりの違いがあり、とても「同等」とはいえなかった…という先行研究もあります。こういった検証を日本でもよく使われる narrative task で行い、今後の日本の英語テスト研究に貢献できればと思い、このテーマを選びました。

Narrative task の特性と一口にいても幅広く、例えば登場人物の関係、行動の理由、途中で場面移動が入るか、などといった絵に描かれているものに関することから、ストーリー進行に必要な語彙レベルやストーリーのトピックというような、想定される受験者の知識にいたるまで、さまざまな要因がからみあって「難易度」を形成しています。こうした要因を基準として「よく似ている narrative tasks」を選び、日本へ一時帰国してデータ収集を行いました。新型インフルエンザが問題になっていた時期と重なり、無事にスケジュール通りに収集を終えられるか心配でしたが、無事に日本人大学生 100人超の協力を得ることができました。彼らに話してもらったストーリーを録音し、評価者を募ってトレーニングを経て点数をつけ、発話を書き起こして分析し、さまざまな観点から「この narrative tasks は本当に『同等』といえるかどうか」を調べました。BCJA からいただいた奨学金のおかげで、協力してくれた大学生や評価者への謝礼を支払うことができ、経済的な不安なく研究を遂行することができました。この場をお借りして、BCJA の先輩方に深く深くお礼申し上げます。

2. 生活について

イギリスに来て驚いたのは、「ほぼすべての店が17時で閉まり、日曜日はほぼ閉店している」ということです。日本で、24時間営業のコンビニや、19時~21時くらいまでやっている商店街のドラッグストアや、郵便局の夜間休日受付窓口などに慣れていたので、これは本当に衝撃的でした。最初は「不便だなあ…」と苦々しく思っていました。本当にほとんどの職場が17時で終わりであるようで、慣れてくると「17時以降は自分または家族のための時間」として、プライベートの時間を大事にしている人々をうらやましく感じるようになりました。大学でも、教師陣も17時にはいなくなりますし、「20時まで会議があった」などということはありません。こうした背景には、共働きが一般的であること、そのために子どもの送迎、家事分担を考えると17時以降も束縛される労働状況では生活が成り立たない、という部分が非常に大きいのでしょうが、フルに働く女性でも家庭生活を大事にする時間が確保でき、男性も同じように家庭で過ごす時間が持てるというのは素晴らしいことだと思います。私もこれを見習って、9時から17時までには研究室で研究や助手の仕事をやり、その後は切り替えてゆっくり過ごす、というメリハリを利かせるようになってから、論文執筆がやりやすくなったと感じています。執筆に余裕のあるときは、洋裁の教室に通ったり、小旅行を計画したり、ウォーキングに行ったりして、息抜きも忘れずに楽しく過ごしています。

3. ランカスターでの経験

ランカスター大学は、経済学、統計学、そして言語学の分野において特に良く知られています。イングランド北西部に

位置し、湖水地方にもほど近いのどかな大学です。街の中心から少し離れると、道路脇には広大な草地が広がり、羊や馬や牛が黙々と草を食む様子が見られます。渡航直後は、日本での生活とのギャップに戸惑いましたが、今では静かで自然の多いランカスターは、研究をするにはもってこいの環境だと思っています。田舎の大学ながらも、教師陣は一流の学者揃いで、図書館や電子図書館の充実度も目を見張るものがあり、最新の研究事情に触れるのに不自由したことはありませんでした。



ランカスター郊外の景色



ランカスター大学構内。左手の建物は礼拝堂で、校章のモチーフとなっている。

研究や学会発表などの他にも、指導教員の率いるプロジェクトやテスト機関での研究助手、学会開催の事務補助など、ランカスターに来て機会を得て挑戦できた貴重な経験がたくさんあります。ランカスターが重んじる「地域への貢献事業」の一環として、地域の小学校の1日語学体験授業で日本語を教えたこともその1つです。大学のコーディネーターの人と一緒に、4歳(小学校一年生の最少年齢)から12歳までのクラスを5つ担当しました。日本大使館から漢字表や浴衣を送っていただき、数を数えたり、お習字をしたり、浴衣を着たりと楽しんでもらうことができました。また、それまでノンネイティブの英語の教育経験しかなかった私にとって、自らがネイティブスピーカーとして教室に臨むという体験は非常に新鮮でした。



小学校で1日体験授業。お習字で見回り。



満面の笑顔で「書けた！！」

この小学校は、マンチェスター周辺にある公立小学校でありながら、実はバングラデシュ人生徒しかいないというきわめて特殊な小学校でした。現在のイギリスでは、外国人労働者・移民を積極的に受け入れる政策により(昨今の不況により、この政策も大転換を遂げようとしています)、イギリス人口よりも移民人口の比率が上回る都市もだんだん出てきていますが、小学校が移民人種のみというのはさすがに非常に珍しいといえます。マンチェスターなど産業革命で栄えた都市の周辺地域は、その後廃れて家賃や生活費が安い地域となったため、比較的安い賃金で働く移民が集まるのだそうです。この小学校も、おそらく最初は所得の低いイギリス人の生徒もいたのだらうと思いますが、徐々に移民が増えるにつれてバングラデシュ人の割合が高くなって、現在はこのようなになっているのでしょう。

しかし、建物は古いながらも清潔で、教室の設備は行き届いており(PCはもちろん、指でスクリーンに字が書けるインタラクティブスクリーンが全教室に1つずつ設置)、学食では栄養バランスの良い献立が3種類から選べて(この日はインドカレー、キッシュ、スペイン風白身魚のシチュー)しかもサラダバーまであり、先生・教育実習生・地域のお手伝いの人を含めると1クラス2~3人のスタッフが生徒の面倒を見る、という非常に手厚いケアが行われていました。教育をとても大事にしている学校で、子どもたちもキラキラした瞳で楽しそうに過ごしていました。移民について批判的なトーンで語られ

ることも多いイギリスにいて、知らず知らずのうちに「マンチェスター周辺の物価の安い地域」と聞いて、「荒れている学校なのかもしれない」と一瞬でも考えた自分を恥じました。

このような体験を経たこともあり、イギリスに来てから、移民や入国ビザをとりまく政策についての関心が高まりました。専門に関して言えば、これからイギリスへの移民に課されることになった英語力テストのうち、十分に妥当性や信頼性の検討がなされていないなかったり、よく知られたテストではあるものの、本来の開発された目的にそぐわない使い方であったり、と心配の種は尽きません(イギリスの言語テスト論および応用言語学者たちが政府に進言をしているものの、成果は芳しくないようです)。また、昨今の政府の発表によると、移民だけでなく「学生ビザで入国し、教育後イギリスで働くようになる」という人口も問題視されており、この問題は私たち留学生が入国できている学生ビザにも波及しつつあります。

4. 終わりに

現在、私は博士論文の最終仕上げ段階に入っており、手直しや校閲を経ながら口頭諮問に備えている状況です。ランカスターに来て、素晴らしい研究環境で博士課程の日々を過ごせたことは、私の人生にとって何よりも大きな収穫でした。また、BCJA 奨学金をいただくことができ、応援してくださる方々がいるんだという実感は、研究がうまくいかなくて落ち込んだときにも大きな支えとなってくれました。これからもBCJA 奨学生であったことを誇りとして、就職活動そして更なる研究活動に邁進する所存です。無事に社会人となり、晴れてBCJA 奨学金の出資側にまわり、恩返しができる日を目標に頑張っ参ります。

(2009 年度 BCJA 奨学生, Lancaster University, 英語学)

2009 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

ロンドンから世界の「人権問題」を考える

名越 正貴

BCJA の奨学金の支援を受けて私が留学したのは、ロンドン大学ユニヴァーシティーカレッジ(通称 UCL: University College London)という大学でした。UCLは、インド独立の指導者ガンジーや、南アフリカ元大統領ネルソン・マンデラが卒業した大学ですし、伊藤博文、夏目漱石など、明治維新以後の日本の国作りに貢献した偉人達も留学していた歴史と由緒ある大学です。

1. 私が所属した UCL 修士課程の概要

私が所属した修士課程は、UCL 公共政策学科人権修士コース(School of Public Policy, MA in Human Rights)と呼ばれ、世界の人々の人権を守るための国際法(国際人権法)や国際連合の仕組み、そして、「人権」という概念そのものの発展の歴史などについて学びます。クラスメートには、ジャ

ーナリスト、国際機関職員、外交官、各国の政府官僚なども多くおり、そういった社会人経験を持つ人たちと議論を戦わせることは、自らを切磋琢磨する大変よい機会となりました。

各授業とも一週間で学ぶべき内容・テーマが事前に明確に示されており、まずは事前に配布されている購読課題を読み込み、その上で講義と少人数形式のセミナーに参加して、自分の理解を定着させる、というのが授業の基本的な形式です。一年間を通じて、授業の準備にはいくら時間があっても足りない、と言う感じでしたが、久々に学生に戻って自分が学びたい分野の文献を好きなだけ読んで新たな知の世界を広げるというのは、大変楽しく充実した作業でもありました。また、UCL 公共政策学科は、自分が所属する修士コースの必修科目に加えて選択科目の幅が大変充実しており、自分の興味と必要に合わせて授業を選択できることが大きな魅力と言えます。

私自身は、大学卒業後、日本のテレビ局に入局し、その後約 5 年間、番組の企画制作を担当するディレクターとして主に報道番組の制作に携わってきました。その中で、自分が目にしてきた国内外の様々な人権問題を解決するために、国際人権法や国際連合をどうやってより効果的に活用することができるのかといったことを学ぶために、私は英国留学を決意したのですが、この目標を実現する上で、UCL 公共政策学科の授業はまさに私にとってピッタリであったと感じています。



UCL の正面

2. 印象に残っている授業課題

● ヨーロッパ人権裁判所の模擬裁判

これは私が所属する人権修士コースの必修課題で、ヨーロッパ人権裁判所の仕組みについて理解すると同時に、それを実際に模擬裁判と言う形で授業の中で体験させられます。私たちは、場所はフランスを想定し、「宗教的象徴物(イスラム教徒が頭に着けるスカーフなど)を身につけた人が公立の大学で教育を受ける権利」についての模擬裁判をしたことがありました。私は法廷助言人(amicus curiae)という立場で実際に弁論を担当したのですが、周りのクラスメートの助けを借りながら何とか質疑応答をこなして弁論を終えた時、友人から「君の弁論の切り口は非常に興味深かったし、勉強になったよ」「英語のネイティブじゃないのに、あれだけの弁論をしたのは驚いた。」といったほめ言葉をかけてもらった時

は、私も留学を通じて少しは成長ができたのかな、という手ごたえのようなものを感じて、大変嬉しかったことを覚えています。

● 国連安全保障理事会のシミュレーション

これは私が選択した「国際機構論」という授業の一環として行われたもので、国連安保理の常任理事国、非常任理事国、ロビイスト団体(巨大石油企業、グリーンピース等)、CNN、新聞記者など、学生がそれぞれの役割に分かれて、自分たちの政策をいかに国連安保理決議の中に反映させて決議を採択させるか(あるいは、採択されないように関係者に働きかけるか)といったことを、約一ヵ月間、授業内外の時間を使って活動していきます。

私たちは「気候変動が国際社会の平和と安全に与える影響」をテーマに模擬安保理を行ったのですが、例えば、気候変動のために水不足・干ばつなどが頻発するようになると、水・食料を巡って人々の間で争いが発生し、ひいてはそれが国際社会の平和と安全に脅威となりえるために、こういった事態に対して国連安保理はどう対応するべきか、といったことについて議論を深めました。私は元テレビ局ディレクターの経験を買われ、他 3 名の学生と共に CNN を担当し、CNN の視点で、安保理の議論にどのように影響を与えられるかということを試みました。(限られた機材での撮影だったために、決して出来の良いものではありませんが、以下の You tube のサイトで私たちグループが作成したビデオクリップを見ることができます。ご参考まで。)

○ UCL CNN News Programme 1st edition

<http://www.youtube.com/watch?v=7iyv6S8ZulU>

○ UCL CNN Debate - Green Peace v.s. American Petroleum Institute

http://www.youtube.com/watch?v=tFYv_ARupN4&feature=related

○ UCL CNN Interview with United Nations Security General (UNSG)

http://www.youtube.com/watch?v=CWP_h7mT1FQ&feature=related

このように、自分たちが学んでいることを机上の学問で終わらせることなく、現実の世界で実際にどのように生かすことができるかということを常に意識できたこと、そしてその過程の中で志を同じくする仲間たちと切磋琢磨できたことは、UCL を進学先を選んで本当によかったと思える理由の一つです。



模擬国連安保理の中でニュースレポートを撮影
(一番左が筆者)

3. 国際移住機関(IOM)ロンドン事務所での職務経験

授業が一段落した4月からは、私は、国際移住機関という、人の移動を専門に扱う国際機関のロンドン事務所でインターンを始めました。イギリスには現在、パスポートやビザを持っていない非正規状態にある移民が 100 万人近くいると推定されています。彼らの中には、人身取引や強制労働の被害者も含まれており、IOM ロンドンでは、こういった移民の人権保護活動を行っています。そして、IOM ロンドンが援助している移民の中では現在中国系が圧倒的に多いのですが、私は大学の学部時代に中国語を専攻していた関係で中国語ができることもあり、こういった移民事情を踏まえて IOM ロンドンに履歴書を送ってインターンを申し込んでみたところ、1ヵ月以上してから IOM の担当者から電話があり、その後、面接を経て採用され、4月から週二日、IOM ロンドンでインターンを始めました。

私は、相談にやってくる中国系の移民からの聞き取り、電子メールによる問い合わせへの対応、そして移民の必要に応じて英国内務省に援助申請を行うための書類を英文で作成するという作業を担当しました。そして、なんと二か月目からは IOM ロンドンから有給の契約を頂くことができ、非常勤職員として働く機会を得ることができました。

実は、大学院も学生がインターンをするのは奨励していたのですが、英語の非ネイティブの私の友人の多くがインターンを見つけることに大変苦勞をしていた中であって、私がこのような形で人権分野に関する大変興味深い業務に関わることができたのは、大変幸運なことと思います。IOM ロンドンの業務を通しては、人権問題を解決するために必要とされる政策、知識、さらには財政面での支援などについて、大変貴重な現場経験を得ることができたと感じています。

また、年度末の試験勉強や修士論文執筆も IOM 業務と同時並行で進め、8月末には無事に修士論文を提出し、UCL 大学院の修士課程を終了することができました。



IOM ロンドン事務所にて。私の右手にいる同僚は中国語が非常に流暢！やはり世界は広いです。



仕事の後は、英国流、パブで一杯！

4. 在ジュネーブ国際機関日本政府代表部での仕事

UCL 大学院修了後、私は幸いにも外務省専門調査員として採用され、現在は、スイスにある在ジュネーブ国際機関日本政府代表部で勤務し、国際人権分野の日本外交を担当しております。ジュネーブには、国連人権理事会(国連総会の補助機関:理事国は日本を含む47カ国)という、世界における人権問題について議論し、国連の政策の中にその議論の内容を反映させることが求められている国連の一組織があります。私は今、ここで議題にのぼる世界各地の人権問題に日本政府の立場から議論に加わるため、連日のように各国の代表団との国際会議に出席しています。

例えば、2010年のクリスマス前、大統領選挙後の混乱が続くコートジボワールの人権状況について議論するため、国連人権理事会の特別会合というものが開催されました。コートジボワールで2010年秋に大統領選挙が実施されたのですが、選挙で負けたにもかかわらず大統領が政権に居座り続けているために、勝利した新大統領側の支持者と当局側との間で衝突が発生し、百名以上の死者が出る事態になってしまいました。こういった状況に対して、人権理事会は「コートジボワールで発生している人権侵害を非難する。関係者すべては、選挙の結果を尊重して、平和裏に政権移行を実現させるべき。」といった内容の決議を全理事国のコンセンサスで採択しました。

こうした決議案は、世界各国の代表団との間の文言交渉を経て採択されるものですが、本件においては、日本を含めてどの国もこれ以上の事態の悪化は避けるべきとの認識のもとで決議案作りに臨み、最終的には全会一致で決議案を

採択するまでの一部始終に関わることができました。テレビ局、そして大学院留学時代を通じて、世界の人権問題解決のために国連システムなどは何ができるか、ということを考えてくると同時に、自分もそういう国連外交の現場で仕事をしてみたいという思いを長年温めてきたのですが、現在させていただいている仕事は、まさに私が挑戦してみたいと思っていただいていることを感謝しております。



国連ヨーロッパ本部内議場にて

5. おわりに

私は現時点では前職のテレビ局の仕事に戻ることは考えておらず、将来は、国連などの国際機関の広報分野などで前職のスキルを活かしつつキャリアを積んで行きたいと思っています。しかし、まだ自分の実力不足を日々の業務の中で感じるため、これからも努力を重ねて少しずつ自分の目標を形にしていければと思っています。

新たなキャリアを目指す上のまだ道半ばではありますが、振り返ってみますと、テレビ局を退社した後、これからの進路に漠然とした不安を感じることもあった私に勇気と自信を与えてくださったのが BCJA 奨学金であったと思っています。奨学生に選んでいただけた時の喜びと感謝の思いを忘れることなく、これからも精進を続けていきたいと思っています。(2009年度 BCJA 奨学生, University College London, 国際人権)



冬の国連ヨーロッパ本部

2010年度 BCJA 会計決算報告書

2009年11月20日～2010年10月31日

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	810,392 円
会 費	207,000 円
利 息	21 円
合 計	1,017,413 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター印刷代	99,750 円
案内状印刷代	7,560 円
封筒印刷代	26,160 円
事務用品代	6,694 円
メール便代	151,440 円
郵便代	2,180 円
H21 懇親会費 (ケータリング・会場費)	133,000 円
H22 懇親会費(会場費)	61,919 円
振込手数料	1,785 円
交通費	160 円
Web サイト維持料	37,840 円
アルバイト料	105,000 円
合 計	633,488 円

2010年10月31日現在の資産状況

次期繰越	383,925 円
------	-----------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	301,333 円
郵便振込	1,694,000 円
合 計	1,995,333 円

支出の部

科 目	金 額
口座徴収料金	14,720 円
奨学金支給	1,200,000 円
振込手数料	7,770 円
アルバイト料	35,000 円
合 計	1,257,490 円

2010年10月31日現在の資産状況

次期繰越	737,843 円
------	-----------

2011年度 BCJA 奨学基金趣意書

2011年6月2日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000年より BCJA 会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、8名の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000 円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関しては Newsletter にて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男 秘書 川崎

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋 3-11-5

20 山京ビル 602 号 (株)ビーユー

連絡先 Tel:03-5211-3855 Fax:03-5211-3858

e-mail:info@be-you.co.jp

BCJA の銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード:9900

店番: 019

店名:0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先 : ビーシージェイエー(BCJA)

2010年度 BCJA 奨学基金協賛者一覧

2010年10月現在

協賛者総数 96名 総額 1,694,000円
派遣者数 8名 奨学金総額 1,200,000円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

三浦省吾	森田青平	野元正弘
南方暁	森亘	橋都浩平
宮島澄子	矢口宏	古沢平太郎
村上正孝	太田隆英	町並陸生
山口隆美	岡井清士	金澤暁太郎
麻生泰	岡村定矩	西田宏子
阿部和彦	小倉暢之	白川正男
山下純宏	加藤久雄	白鳥令
山田昭廣	河合秀和	菅井直介
横川信治	川本敏	難波光義
横山昭	北政巳	西村閑也
横山俊夫	荒記俊一	早瀬尚文
吉田和子	石井加代子	鈴木善三
吉田徹夫	石松須美子	須田英明
青柳昌宏	石渡淳一	諏訪部仁
有富寛	細田高道	関根道和
安藤奠之	益山新樹	関谷透
安藤仁介	齋藤友博	高須俊明
飯野正光	齋藤文良	高柳和夫
猪熊葉子	佐藤修二	田口博國
池上忠弘	塩田洋	田島裕
石井明	齋藤勉	多田稔
山下博	野城真理	田中晉
木村精二	稲垣久雄	田中典子
桐敷真次郎	井上公正	田中治彦
河野豊弘	岩崎淳	田中彌寿雄
河本直紀	梅川正美	玉井俊紀
小鍛冶繁	中川威雄	田村一郎
小林啓二	長澤泰	塚原重雄
柴田賢	中山修一	塚本泰
清水護	浪田克之介	東後勝明
能口盾彦	杉浦和朗	中井晨

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJAのホームページ<http://www.bcja.net/>では、過去のニューズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

(ishiikayoko@hotmail.com まで)

Yahoo!グループ[bcja]のご利用案内

Yahoo!グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Yahoo!グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。既にメンバー登録を開始しております。登録を希望される方は、下記の URL にアクセスして下さい。

<http://groups.yahoo.co.jp/group/bcja>

電子メールのアドレスをお持ちでない方、また、個人、会社のアドレスでは何かと不便な方は、yahoo の電子メールアドレス(旅先などで共用 PC から簡単にアクセスできます)が新たに取得できますので、そのアドレスをお使い下さい。

[編集後記]

青柳会長より後を受けて、BCJA ニューズレター27号より編集を担当させていただきました。BCJA ニューズレター27号では、BCJA 前会長退任のご挨拶、BCJA 英国留学奨学金2010年度選考結果報告、年次総会報告、2006年度および2009年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの留学報告6件、会計報告、2010年度BCJA 奨学基金協賛者一覧などを掲載することができました。原稿をお寄せいただいた方々に大変感謝いたします。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、会計担当の島津様、川崎様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、慶應義塾大学、London School of

Economics, 2003-2004、ishiikayoko@hotmail.com)